

## 自己評価報告書

平成 23 年 5 月 15 日現在

機関番号：32677  
 研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2008 ～ 2011  
 課題番号：20520182  
 研究課題名 (和文) 長門本平家物語に関する基礎的研究

研究課題名 (英文) Fundamental Research on "The Tale of the Heike, Nagato Version"  
 研究代表者  
 小川 栄一 (OGAWA EIICHI)  
 武蔵大学・人文学部・教授  
 研究者番号：70160744

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：平家物語の成立 平家物語の諸本 長門本平家物語 延慶本平家物語

## 1. 研究計画の概要

平家物語には数多くの異本があり、諸本の分類や系統について多くの研究がなされてきた。中でも延慶本が最も古い形態を伝えるという水原一の説が現在有力視されている。長門本は延慶本とは共通する本文が多く、両本はきわめて近い関係にあると目されているが、長門本の研究は延慶本ほど詳しくは進められていない。延慶本と長門本を子細に比較検討すると、長門本の本文の方が延慶本よりも古いと認められる部分もあって、延慶本古態説にも再考の余地がある。

本研究では長門本研究の基礎を築くために、以下4項目を主たる目標としている。

(1)『長門本平家物語自立語索引』の作成 (平成 20 年度に完成)

(2)『平家物語長門本延慶本対照本文』の作成 (平成 22 年度に完成)

(3)長門本の成立年代を明らかにする研究 (一部、論文により発表)

(4)長門本と延慶本との成立上の関係を明らかにする研究 (平成 23 年度の課題)

(1)は長門本の自立語検索を可能とする資料の作成、(2)は長門本と延慶本の成立関係を研究する基礎資料の作成、(3)は日本語史的な観点から長門本の成立時期を明らかにする研究、(4)は本研究の最終目標である。

このほか、平家物語の風評に関する研究にも取り組んでいる。

## 2. 研究の進捗状況

(1)について、平成 20 年度研究成果公開促進費の交付を受けて『長門本平家物語自立語索引』(全 1062 ページ 勉誠出版 平成 21 年 2 月)を刊行した。この書は麻原美子・小

井土守敏・佐藤智広編『長門本平家物語』一～四(勉誠出版 平成 16～18 年)を底本にして、すべての自立語の所在を、底本の文字表記ごと一括して示したものである。本書はコンピュータで作成した長門本語彙データベースから索引の形式でアウトプットしたものである。また、各語の用例数を簡単に計測することが可能で、語彙の全体的な傾向をつかむことができる。さらに、底本における表記ごとに示したことも大きな特徴である。これによって、本書が底本の漢字表記をいかに読んだかがわかり、読みの正しさを実証するのみならず、ある語についてどのような表記形態があるかがわかり、文字表記の研究にも大いに役立つ。平家物語の文学的、語学的研究をよりいっそう推し進める資料として高く評価されている。

(2)について、平成 22 年度研究成果公開促進費の交付を受けて、25 日に刊行した(『平家物語長門本・延慶本対照本文 上・中・下』計 3 冊 全 1522 ページ 勉誠出版 平成 23 年 2 月)。この書は長門本と延慶本の本文を上下に対照させて提示することによって、本文相互の異同や出入りの状態を一目で把握できるようにしたもので、長門本と延慶本との成立上の関係を明らかにする研究に、大いに役立つとともに、平家物語全般の成立を究明する基礎資料となるものである。

(3)について、約 70 ある長門本平家物語諸本中の善本といわれる国会図書館貴重書本((元禄・宝永頃<1688～1711>書写。「国会本」と称す)の言語年代を研究した(5 雑誌論文①)。国会本の自立語を対象にして、日本語史の上で中世から近世にかけて進行したオ段長音の開合と四つ仮名の混同、二段活用の

一段化の例数等を調べた。この結果、国会本は室町末期から江戸初期における状況を反映することが明らかになり、長門本最古の写本である赤間本の存在が確認される慶長七年(1602)頃の状態とみてさしつかえないという結論をえた。ただし、国会本の転写の過程で混同例、一段化例が混入した可能性もあり、長門本がこの時期の成立とはまだ断定できないので、今後のさらなる調査が必要である。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。  
(理由)

本研究の目標とする4項目のうち、3項目について所期の研究成果を上げている。特に、本研究によって刊行した図書2冊は、いずれも1000ページを超える大部で、かつ従来より学界から待望されていたものである。これらの刊行によって、本研究の今後につながるだけでなく、他の研究者にも便宜を与え、飛躍的な進捗が予測される。

### 4. 今後の研究の推進方策

(4)を平成23年度の課題とする。『平家物語長門本延慶本対照本文』を利用して、長門本、延慶本両本の章段・記事の全体的な対照表を作成し、それぞれの対応関係を詳細に研究する。この結果、両本全体の関係が明らかになると予想される。現在、『平家物語長門本延慶本対照本文』では扱うことのできなかった、両本で遠く離れた箇所が存在する対応記事・章段の本文対照表を作成し、両本の編集方針の違いを研究している。

平家物語における「風評」についても日本語史的な観点から研究に取り組んでいる。平家物語には伝聞情報の表現が多く用いられている。現代のような通信システムやメディアが未発達であった時代において、情報のほとんどは口頭で伝えられていた。口頭情報は正確に伝達しにくく、いわゆる「風評」、「うわさ」になりやすい。現代の場合は、不確実な情報が流れても、その真偽を確実な情報ソース(当事者の発言、文字による記録、事件の映像など)から認証可能である。しかし、平家物語の当時、確実な情報ソースを得られる人は一部に限られ、一般の人々にとってみれば、口頭による情報がすべてであって、それ以上に確実な情報ソースを得ることはきわめて困難であったと考えられる。

このような不確かな口頭情報の中で、その当時の人がどのように情報を解釈し、自らの行動に反映させていったのか、平家物語を資料にして実証的に明らかにしたい。また、平家物語における風評の表現は一定の形式(ト聞コユ、聞キ及ブ、沙汰ス、申シ合フ、他)を有しており、物語の進行にも重要な役割を

果たしている。さらに、風評で表現する情報と、直接の見聞として表現する情報との違いを明確にすることによって、平家筆者と情報との距離感がわかる。筆者の立場、階級、身分などが自ずと見えてくるのであって、平家成立事情の一端も明らかになると考えている。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

小川栄一「日本語史料としての長門本平家物語」(『武蔵大学人文学会雑誌』41-3・4 2010 424~456 ページ) 査読の有無: 無

小井土守敏「長門本『平家物語』校注ノート—井上九郎光盛の名乗りについて—」(『昭和学院国語国文』37 2009 1~5 ページ) 査読の有無: 無

[学会発表] (計0件)

[図書] (計2件)

小川栄一・麻原美子・大倉浩・佐藤智広・小井土守敏『長門本平家物語自立語索引』(勉誠出版 2009 1062 ページ)

小川栄一・麻原美子・大倉浩・佐藤智広・小井土守敏『平家物語長門本延慶本対照本文』(勉誠出版 2011 1522 ページ)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]